

願成寺報

平成二十六年九月十六日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二・五二・九六〇一

■ 秋季彼岸・永代経のご案内

左記により勤修いたします
万障お繰り合わせて お誘い合わせて
ご参集下さい

○ 草取り・餅つき会

恒例となりました、草取りと餅つき会をします。
真面目に草取るもよし、
賑やかしに応援するもよし。
寺友の輪を広げましょう。



九月 二十日(土) 午前十一時 草取り・餅つき会

昼食あり

二十二日(月) 午前十一時 法要のみ

二十三日(祝) 午前十時 法要・法話

午前十二時 お斎(昼食)

午後一時 法要・法話

浄泉寺(岡崎市)

住職 戸田恵信 師

「お任せ出来ない余計な能力」

そろそろ七歳になる雌犬が今も傍らで寝ています。彼女を見るたびに真ん丸だなど思います。

体型もさることながら、生き方が真ん丸で羨ましく思います。

野良犬の経験のない彼女は、

隙あらば逃げ出そうという意欲もなく

飼い主の為すがままに暮らしています。

それは時々、主人の意に沿わないこともあるけれど、

それも愛嬌で、叱られるとお腹を出して服従します。

残念ながら反省というものは無いようです。

だってしょうがないじゃない…と見つめ合って終わりです。

きつと彼女は、私が食事を与えなければ餓死してしまうでしょう。

そんな彼女が意地らしくて、愛おしくて…

勇気をもったりしています。

彼女は「お任せ」の命をしっかりと生きています。

他の犬を羨ましがったり、愚痴を言ったり、泣きわめいたりせず、

キツパリとその命を過ごしています。

それは如来の「そのまままで来い」のお指図の通りの姿です。

私は「このまま」が嫌で、苦しくて…

つくづく、余計な能力を持ち産まれて来たなど呪います。

私は彼女を如来の遣いだと思っています。

だから一生懸命手を合わせながら

お世話させて頂いているのです。



佛智ノ不思議ヲウタガイテ 善本徳本タノム人

辺地懈怠ニムマルレバ 大慈大悲ハエザリケリ

《正像末法和讃・親鸞聖人》

● 正信偈ノート⑫・依釈段の序讚

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

印度西天之論家 中夏日域之高僧
頭大聖興世正意 明如来本誓忘機

黄色の勤行本の
二十五ページから

印度西天の論家、中夏(中国)・日域(日本)の高僧、
大聖(釈尊)興世の正意を顕し、
如来の本誓、機に忘れることを明かす。

・機 私達(＝煩惱熾盛の凡夫)のこと (筆者)

〔浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〕

・得道の人を信ぜざれば信不具足なり 《涅槃経・迦葉品》

数学であれば、新しい原理を証明するのに理論的考察だけで済むのでしょうか、物理学他では実験による実証が必要です。人生を転換するような原理についても、頭で解るだけでは不十分です。その原理に生きた人の後ろ姿を追いかけて、体験的に実証していかなければなりません。

バンジージャンプで遊んだことがあります、命綱となるゴムの太さや耐久性を確かめてもなかなか跳ぶ気になりませんでした。似たような体格の人が先に跳んでくれて、その楽しげな姿に接してやっと安心できて意欲も湧いて、その姿が実際に跳ぶ勇氣となりました。

「弥陀の大悲を生きる」というテーマがあった時、耳で聞き頭で解っただけでは不十分です。身体に求め、先を歩む人に共感していくことがどうしても必要です。その共感の中に開かれてくる世界でやっと私達は済まれるのではないのでしょうか。

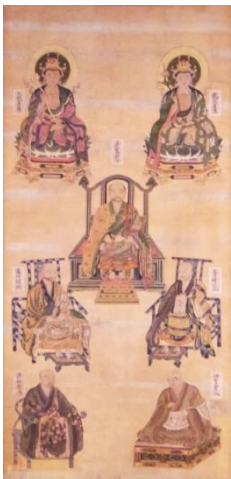
・我々から我らへ

ライオンも鼠も蟬もダンゴ虫も与えられたままを生きています。我々人間だけが「べきだ」というある種幻想の世界を持ち、現実との乖離に迷い苦しんでいるのです。「べきだ」を幻想と断じた後、何が残るかは判りませんが、断じようとする所に、沢山のお念仏する人々の後ろ姿が見えてきます。その方々の姿は「あゝ」と共感できる慶びと共に顕われると思います。その慶びに際し、私の小さな悲しみや苦悩が、より大きな悲しみや苦悩の中に溶け出していくのでしょうか。そしてその時、それぞれの悲しみや苦悩そのものが、大きな働きの一部として他を慈しむのだと知らされます。我執を捨てようとする所で『念仏する我らを生きる』という無条件の生き甲斐を発見するのだと思います。

・得道の人(七高僧)

お念仏の道は『苦悩を問いとして大慈悲を歩む道』だと戴きます。なので特別な人だけが「得道の人」という訳ではありません。苦悩を見据え、念仏申す態度で歩まれた方は、須らく得道の人と仰ぎます。

けれど、その苦悩の有様はそれぞれに特別であり様々です。その問いへの解答にも個性が出ます。親鸞聖人は、大きな苦悩に迷われ、その中で領かれた大慈悲の滴を書物にも著された七人の方々を七高僧として仰がれます。方々の領きにご自身も領かれて、『正信偈』に紹介しておられます。そこには「方々の領きを力として歩んできて欲しい」との願いが込められていると戴きます。



願成寺蔵・七高僧掛軸

竜樹菩薩 善導和尚 源空聖人

曇鸞和尚

天親菩薩 道綽和尚 源信和尚

創作・目連尊者の廻心

ずうっと昔のある年の七月十五日のことです。

目連尊者は、行者達に食事を振る舞いながら、流れる涙を止めることができなくなっていました。

「目連様、皆喜んであなたの供養して下さった食事を戴いています。その歡びの功德は、ご母堂様を餓鬼道から救うのに充分な力となるでしょう。…何をそんなに悲しまれるのですか？」

「いやあ… 儂は悲しくて泣いておるのではないぞ。有難かったのだ、母にも皆にも沢山のご恩を受けておった。そのことに今気が付いた。そのご恩を今の今まで忘れ果てて暮らしておった。申し訳ないことであつたなあ…」

行者は神通第一の目連尊者の、その言葉に、耳を疑いました。

「確かに儂は神通力を使うようになって、誰かの世話をこそすれ、他人の世話にだけはならず暮らしてきた積りであつた。けれど、それが思い上がりであつた。今日も皆が居てくれなんだら母を救うことは出来なんだ。そして、その母もきつと、幼く無力な私の為には罪を作つたに違いないのだ。だから母の、あの哀れな姿は、私の身代わりであつた。私が受けるべき苦しみを代わりに受けておつて下さつた、そんな姿であつたのだ。儂は神通力を使うようになって久しいけれど、これまで母の姿を探すことはなかつた、忘れ果てておつたのだ… そのことが申し訳なくてなあ…」

行者にも、空腹を泣いて母を困らせた記憶が蘇りました。

「ずっと支えられておつたのだ、母にも… 皆にも。神通力を得意になっておつた儂こそ、最も浅はかな雑修の行者であつたのだ。申し訳ありませんでした」

涙溢れる目連様を、お釈迦様は愛おしく抱きしめられたのでした。

〈仏説盂蘭盆経より創作〉

歡喜会（お盆）を勤めました

世相を反映してか、お盆がだんだん忙しくなくなってきて、歡喜会を勤める余裕ができました。

急に思い立ってハガキでご案内をし、勤めることが出来ました。不十分で急なご案内にも関わらず、（多く数えて）二十名程の方々にご参加頂きました。

これからも続けていこうと思います。

寺に集まる機会を増やし、

寺友の輪が広がればいいなと思っています。

供養やお盆について真宗では

あまりウルサイことを言いませんが、

やはり大事だと思います。

「供養は供養する人が逆に供養される」

という意味において大事。

「支えられている命の真実を歡び直す」

という意味で、お盆は絶好の機会だと思います。

強制はしませんが、その心を宗に、

何かすると良いと思います。

「何かしないと心が空っぽになってしまう」と心配です。

お寺では夕方からお勤めをして、

盂蘭盆経の目連様の話を聞いて頂いて、

簡単な食事に亡き人を偲びあって、

花火で童心に返ろうと思います。

皆様の生き甲斐が仄かに灯るように

お手伝いしたいと思います。



遊んでる写真ばかりですが
ちゃんとお勤めもしています
総代の村田様が手作りして下さった
灯籠もキレイです

行事予定 平成二十六年十二月まで

二十三日 (火・祝) 秋季彼岸・永代経法会(戸田恵信師)

お馴染みの先生の情熱的な法話

十月 一日 (水) 月例法話・茶話会 月例会は 午後一時～

十一月 一日 (土) 月例法話・茶話会

十二月 三日 (月・祝) 本山団体参拝(日帰りバス旅行)

十二月 一日 (月) 月例法話・茶話会

六日 (土) 報恩講

七日 (日) 真宗寺院で最も重要な行事です

本山納骨堂法会・団体参拝のご案内

市内・近郊のご寺院様と貸切バスにて日帰り参拝します

■期日 平成二十六年十一月三日(月・文化の日)

■日程 六時三十分 寺・豊橋駅集合

十時〇〇分 本山着

十四時三〇分 中部国際空港

十五時四〇分 めんたいパーク

十八時三〇分 豊橋着(予定)

■会費 八、五〇〇円 バス・昼夕食・旅行保険代他

■納骨 納骨の方は一霊につき二万円必要(納骨冥加金)

■申込 願成寺までご連絡下さい(十月十五日ごろまで)

■他 ご不明な点は寺までお問い合わせ下さい



後記

♪ありのまの姿見せるのよ

伸びやかな歌声が巷に溢れた夏でした。どんなシーンで歌われているのか気になって「アナと雪の女王(2013Disney)」を娯楽ではなく勉強のために観に行つて来ました。以下その内容を少し書きます。

○アナ王女にはお姉ちゃんがあり、お姉ちゃんには触れたものや空気を凍りつかせるという特別な能力がありました。その能力は危険なので王様は誰にも見つかからないように隠し徹すことを命じました。お姉ちゃんは一所懸命に言い付けを守つて、いい子でいるように育ちました。

ようやく成人する頃、ご両親が旅先で事故に遭つて亡くなります。お姉ちゃんが後を継いで女王となる戴冠式の日、ふとしたことでその能力が露見してしまいます。お姉ちゃんは「化物だ」とザワつく人々の前から姿を消し、山の中で自由に暮らすことを決断します。

これが本当の自分なんだと、能力を解放し素晴らしい氷の城を造りますが、独りぼっちで寝てくれる人はありません。心を凍りつかせた「ひきこもり状態」で過ごします。

アナ王女はそんなお姉ちゃんを心配して連れ還しに行きますが、お姉ちゃんも凍りついた心を融かすことができず。逆にアナ王女自身が凍りついてしまう危機に陥ります。

その姿に逢つて、お姉ちゃんも妹がいつも慕つていてくれたこと、今も危険を顧みず援けに来てくれたことに思い至ります。

お姉ちゃんには、慕われていた本当の自分が付いた印が顕われて。物語はハッピーエンドで終わります。

○「本当の私」について示唆した物語だと受け取りました。私達も余計な能力を与えられていて、持て余して生きて、生きることを空しくしてはいないでしょうか？

「本当の自分に目覚める」は案外難しいと思います。そして、けれど単純なのかもしれません。



♪113-